二　草創期の東京外国語学校

設立当初の外語は開成学校の一部とみなされていたという。それもそのはずで、旧南校の敷地に開成学校の新校舎が竣工し専門学科生徒がそこに移った段階で、一ツ橋通町一番地の旧開成学校跡地に外務省内に残っていた外国語学所が移転し、開成学校の語学生徒と合併して東京外国語学校となったのだから。一八七三（明治六）年十一月五日、文部少輔田中不二麿は右大臣岩倉具視にこう報告している。「外国語学所之儀元開成学校教場へ合併致シ自今外国語学校ト相称候間此段上申候也」。校長は開成学校副長の伴正順が兼任した。学科は英、仏、独、魯、清の五学科であった。開設当時の生徒の人数は英二三六、仏七五、独九六、魯一四、清三二の計四五三名であった。従来の「外国語学校教則」では修業年限は四年であったが、『文部省第一年報』（一八七三年）所載の東京外国語学校報告によると、修業年限は下等語学三年、上等語学二年の五年制とされていた。しかし満足な履修規則も出来ておらず、校則の変更もたびたび行われたようである。その一環として翌七四年二月、東京外国語学校は諸規定の改定を行い、「語学課程ヲ上下二等ニ分チ六年間即毎一等ヲ三ケ年トシ一年ヲ二期ニ分チ一等ヲ六級ニ分ツテ教則ヲ編定スル」、つまり年二期のセメスター制で、下等六級、上等六級の六年制の学校に改めたのである。これにともなって、学科目も改正され、開成学校教授のドイツ人リットル、英国人ソンマール、外語仏語学教諭のフランス人ムリエがこの改正作業をおこなう（この時の学科目については資料編および本書のロシア語の項を参照されたい）。

開設直後の外語では規則ばかりか校長の交替もめまぐるしく、一八七四年四月十二日伴正順が宮城外国語学校長に転任し、同月十五日に文部省六等出仕の柳本直太郎が副長となり、同月二十二日文部省五等出仕辻新次が校長を兼任

する。辻は一八六九（明治二）年の開成所教授試補辻理之助と同一人物であり、後に文部次官、大日本教育会会長、さらにわが国初の仏学会会長を務めることになる。因みにメーチニコフの下宿先は神保町の辻宅であった。

草創期の外語の人気

新設されたばかりの外語の人気は絶大なものだった。

首都に外国語学校が設立されたと聞くや、全国各地から生徒たちがまさに群れをなして集まってきた。なかには、十一、二歳の子供もいたが、大部分は青年であり、時には妻子もちで、すでに先般の内乱でなんらかの英雄的武勲をたてた大人のサムライまでもまじっていた。そうした生徒のなかには、宣教団の経営する学校や、その他なんらかの方法で、フランス語、とくに英語、さらにはロシア語の基礎知識まで身につけたものもいたが、大多数のものはまったくの初歩からはじめねばならなかった。

辻　新次

政府は官費で食事と住居を提供したばかりか、自腹をきって若干の給与（月一ドル）まで支給したので、希望者はますます殺到した。……生徒数がもっとも多いのは英語科だった。そのためまもなく英語科だけをべつの校舎に移し、独立した学校を開設せねばならなくなったほどである。

（メーチニコフ、前掲書、二七二―二七三ページ）

ここで指摘されている官費制度とは、一八七三（明治六）年十二月に定められたもので、「東京外国語学校ニ於テハ下等語学第二級以上ニシテ其学術優等ナルモノト

ナス」（第十章）とあり、金額は通弁学生（一国語学を卒業し他の語学に転じた者）月額一〇円、語学生同八円とされた。こうした好条件のため、生徒数はますます増え、一八七四年三月の生徒名簿によると、英語科は三二一名に膨れ上がっている。このため同年十二月に英語科は独立して東京英語学校となり、さらに一八七七（明治十）年には東京大学予備門となるのである。ちなみにこの英語科には岡倉覚三（天心）、内村鑑三、新渡戸稲造といった近代日本文化を担う錚々たる人物が籍を置いていたことは銘記されるべきであろう。

官費生から貸費生へ

これ以来東京外国語学校は他の外国語学校がすべて英語学校と改称するなかで、唯一英語科を欠いた学校となる。参考までに一八七四（明治七）年の東京外国語学校の財政状態を見ておくことにしよう（以下の金額は文部省よりの補助金額）。この年の文部省全体の出費が一、三六八、五二九円と洋銀七二、三五〇ドルであるなかで外語は八三、〇一九円と洋銀二、四一一ドルであり、後に合併されて東京大学となる東京開成学校一三一、四八五円と洋銀一四、八三四ドル、東京医学校八四、九四五円と洋銀二九、四〇三ドルの合計額のおよそ三分の一強をしめているのである。この額は大阪英語学校の四倍、愛知英語学校の一〇倍、東京師範学校と比べても二倍半である。このこと一つとっても、文部省が新設の外国語学校にいかに力を入れていたかが分かるではないか。今日の外国語学校の財政的規模を思う時、隔世の感がある。しかしこうした状態は長続きせず、翌一八七五年には台湾出兵による軍事費の増大におされて、文部省予算は大幅に削減され、同年上半期の外語の経費は二四、二九一円と洋銀一、一五三ドル、分離した英語学校は一六、七四二円と、ほぼ半減してしまうのである。

この財政難を乗り切るために、外語当局は同年四月に官費生を廃止し、従来の官費生を貸費生とするという手段を

講じ、学業を続けられなくなる生徒が出たため、生徒が騒ぎだすという事件が起こったことを、メーチニコフは報じている。ちょうど時を同じくして辻校長が免ぜられ、かわってフランス留学からもどって間もない中江篤介（兆民）が校長に就任する。『文部省第三年報』によると彼の校長在職は一か月弱であり、儒学を無視する文部省の教育方針と対立したのが辞任の理由だとされてきたが、ここに面白い証言が残っている。一九一〇（明治四十三）年の『校友会雑誌』で前愛媛県知事の安藤謙介は「旧語学校回顧談」と題してこんなことを書いている。

半ケ年後中江篤介氏が語学校の校長にならるゝに及んで、氏は生徒の不勉強にして且つ規則を犯すを嘆ぜられ、是は畢竟修身教育が欠乏して居る結果だと断定せられ、「基督教は西洋の学生には適するけれど、日本学生に強ふる訳には行かず在来の仏教は尚更修身教育には適しない、是は是非とも孔孟の道を以てするより仕方がない、」と考へられ而して乱暴者を孔子時代にやつた様に鞭打つ事にせられた。先づ第一の乱暴者であつた安藤謙介を校長室に呼ばれて修身教育に関する意見を問はれた。自分は「此の修身教育主義には大賛成ですが、然し校長は何程骨を折られても今の文部当局者は大抵福沢の門下生であつて、儒教を軽視して居りますから、とても実行は出来ますまい」と答へた。すると中江校長は「此の議が用ゐられなければ自分は職を退くのみ」と厳然と云はれた。自分は直に語を継いで「生徒取締上鞭つ事は旧式であつて、

校長になる数年前、フランス留学時代の中江兆民

今日は最早や行はれますまい。昔の聖人は六芸に通じ聖賢と呼ばれ弟子は三千人もあつたが、其の弟子等は皆其の人の徳を慕うて入門したのである。又彼の村夫子といはれた連中も月謝を取るものなく師弟の関係は恰も家族に於ける家長の如きものであつたから、乱暴者ものをば鞭つ事も出来たのであるが、今日の生徒は、月謝を払ひて知識を買いに来る御客で、学校はその知識売捌所で、先生は六芸に通ぜず且つ人数も昔と異りて多く、一生徒にして多数の教師に就くから、少し熱心に専門的に研究しやうとする生徒は勢其のつくべき先生を選ぶ。是に於いて教師の優劣を比較して、不服を唱へるに至る。例へば中学校の生徒などは極く無邪気であるが、先生の欠点を見抜く事がなかなか上手である、故に生徒をして勉強せしめ規則を遵奉せしむるには、是非とも積極的に奨励法を用ゐるより外に方法はありませぬ。其の方法は各級に臨時試験を行ひ其成績良好なるものには不時進級させ、又学期試験の優等者には賞を与え、劣等者は落第させ、之を掲示し其父兄を呼びて訓戒をなし、家庭と学校との連絡を取るのがよからうと思ひます」と意見を述べた。其の後校長の儒教主義も果して文部当局の容るゝ処とならず校長は遂に辞職せられ肥田照（ママ）作氏が新たに校長に任命せられた。（一〇―一一ページ）。

引用が長くなったが、これまでの兆民研究では、外語時代について詳しいことがあまり触れられていないので敢えて紹介した。それにしても東洋のルソーとされる兆民が、修身と鞭打ちを生徒指導に採用しようとしたというのは素顔の兆民を知るうえで重要な事実であろう。時間的にみて兆民の校長就任の裏には、官費生の廃止による騒動を持ち前の豪傑肌で力で押さえ込もうとする文部省の思惑がはたらいていたのではなかったか。この安藤は当時の外語生徒のリーダー格の人物で、談話会を結成して会長となり、生徒による講演会を開催していた。その後、彼は教科書不足問題で文部省に直談判に出掛けて、放校処分になり、この処置に憤慨した生徒全員が退学届けを出す騒ぎとなり、安藤の説得で一か月後に復学させたという。このエピソードは開学当時の外語生徒たちの気概を鮮やかに照らしだしている。そして放校処分にあった安藤は辞職した兆民にフランス語を学び、勝海舟の斡旋で外務省に出仕し、ペテルブルグ公使館員となり、勤務のかたわら聴講生としてペテルブルグ大学で法学を学ぶ一方、同大学で日本語と書道を教

え、文豪ゴンチャロフとも親交を結び、彼をして「優美流暢に、洗練されたロシア語をしゃべるアンドウ＝サン」と言わしめている。彼が愛媛県知事となるのも、日露戦争後六、〇〇〇人以上の俘虜が松山に収容されたためであり、ロシア通の安藤は彼らをじつに人道的に扱い、このことがその後の日露関係に好影響を与えることになる（沢田和彦「ゴンチャローフと二人の日本人」、『スラヴ研究』四五号参照）。

この安藤の生きざまをもって、一般化することはできないが、当時の外語の雰囲気を知る一助にはなるだろう。彼らにとって卒業することは必ずしも目的ではなく、語学を修得し、それによって生きた国際関係を築くことをめざす人材が多かったのである。したがって旧外語の実態を浮き彫りにするには、中途退学者も含めた外語在籍者のその後の活動をも視野におさめねばならないのだろう。それほど多彩な人材をこの学校は擁していた。「生徒の総数は開成校が四百人位であつたのに、語学校は大凡九百名ばかり居た。此の内には宮様及び当今天下の名士と云はれる程の人、伏見宮殿下、二條基弘公、小村外務大臣、梅博士、鳩山博士の如き人が居られた」（安藤、前掲書、一〇ページ）

一八七五（明治八）年五月七日、校長肥田昭作名で文部大輔田中不二麿に提出された『東京外国語学校年報　明治七年』によって、開学一年目の動きを見ておこう。まず生徒数を増員するために七四年六月官費生の給与金を月額五円以下にし、さらに官費生の枠を校費の一〇分の一の七二五円に抑え、それでも増員された生徒を養いきれなくなり、九月官費生を廃止し、その分の予算を教育費に回したことが記されている。これがすでに述べた翌年二月の官費生から貸費生への移行の前触れとなる。またこの年独仏語学官費生一八名が上等第六級に進級したため、開成学校へ転学させたとある。さらに同年三月校内罰則を制定し、六年制に移行するにともない、教則改定を行ったと報告したうえで、文部省への要求事項が出される。「先是本校ハ外国語学ノ名ヲ顔スルト雖魯語清語学ヲ除クノ外其実ハ専門予備校ノ如キ者ナリシカ英語学校分立以還既ニ本校生徒専門校ニ転進スル等ノ事情略絶タルニ似タリ是ニ於テカ初テ語学

校ノ名実共ニ行ハルヘキ機ニ至レリ」ここには外語が当初担わされていた専門学校への予備校的性格が一八七四年七月をもって終わり、外語独自の教育がこれから始まることが明記されている。その上で開成学校の旧校舎が老朽化しており授業の障害になっていることと、上級生徒の教育のために博士級の優れた教師の雇い入れが是非とも不可欠であることが訴えられる。なぜなら「本校ノ生徒タルヤ徒ニ尋常通訳ニ供スルニアラズシテ他日国家ノ需ニ応シ大ニ有用ノ器トナルモノナレハナリ」この一節には開成学校の支配を脱した外語の校長としての自負が伝わってくる。

創立期の教員

一八七四（明治七）年時点での教員数は日本人一七、外国人一〇名の計二七名であり、生徒の内訳は仏語一三六名、独語一七九名、魯語七九名、漢語二九名、計四二三名であった。

『東京外国語学校官員並生徒一覧　明治七年三月』をもとに、当時の教員スタッフを紹介しておく。

学校長　辻　新次
仏語学二等教諭　今村　有隣
同　三等教諭　大工原信吉
同　教諭心得　興津　辰矩
　　甲斐謙之助
独逸語学教諭心得　山内　光屋
　　渡辺　廉吉
魯語学五等教諭　柳田　二郎
　　大前　退蔵
四等教諭　中川　元

漢語学一等教諭　顕川　重寛
同　四等教諭　蔡　祐良
同教諭心得　石崎　齋之
　　川崎　近義
数学四等教諭　黒沢　壽任
仏語学外国教諭　仏人　ムリエ
　　同　ピジョン
　　同　ブラン
　　同　エドガー・プラー
独逸語学外国教諭　独逸人　ヴィトコフスキー
　　同　トーゼロウスキー
　　同　ハンゼン
　　同　クライネル
　　同　コニッケ
魯語学外国教諭　魯人　トラクテンベルグ
　　同　メーチニコフ
漢語学外国教諭　清人　葉　松　石

文部省報告の人数と合わないが、資料的に確認できたスタッフは以上のとおりである。ほとんどの日本人教諭は語学所の流れを汲む者だが、中川元は一八七二（明治五）年南校を依願退学し、司法省の明法寮に入学し、リブロールにフランス語を、ブスケ、ボアソナードに法学を学んだ後、文部省に移り外語教諭になった変わり種である。彼は一

八七八（明治十一）年に師範学校調査のため文部大丞九鬼隆一に随行し、折しも万国博覧会が開かれていたパリにわたり、そこで前述のメーチニコフに大著『日本帝国』の資料となる古代日本文学関係の文献を贈る際の九鬼の通訳を務めているから、外語時代に両者はかなり親交をもっていたはずである。

それにしてもこれだけの教員で、四〇〇名以上の生徒を相手に週五日、一日六時間の授業を行ったわけだから、教員の負担は相当なものだったであろう。

英語学校長との兼任だった肥田は就任二か月後の一八七五（明治八）年七月十八日、渡部温が校長に任ぜられたのを機に外語校長の任を解かれる。このように校長が猫の目のように頻繁に代わった背景には、草創期の外語の位置づけが、文部省のなかでも明確でなかったことと関係があると思われるが、真相は判然としない。そんななかで一八七七年一月に内村良蔵に代わるまでの一年半という比較的長期にわたって校長を務めた渡部については、片桐芳雄「幕末明治の洋学者・渡部温（一郎）覚え書（1－3）」（『愛知教育大学研究報告』、第三二－三四輯、一九八三－一九八五年）にその詳しい経歴が紹介されている。蕃書調所＝開成所において英学を学び、沼津兵学校教授を務め、一八七四（明治七）年長崎外国語学校長兼同師範学校長を経て外語校長に任ぜられた渡部は「通俗伊蘇普物語」、つまりイソップ物語を英語から翻訳した人物であり、このすぐれた平易な翻訳によってこの寓話は日本人に広く読まれることになるのであった。

外国語教育の方向転換

彼の在職中に待望の寄宿舎新築がなり（一八七五年八月三十日）、生徒は英語学校内の旧寄宿舎から移転し（同九月一日）、魯語学貸費生および漢語学貸費生の定員が三〇名と定められ（同十二月三日）、さらに一八七六年二月十日

二　草創期の東京外国語学校

1873（明治６）年11月、東京外国語学校設立後、1885年９月までの校長はつぎのようである。

校　　長	在任期間	経　　歴
伴　正順	明治６年11月５日－７年４月	土佐藩士族。開成学校副長を兼勤。宮城外国語学校長に転任。明治11年大審院判事。15年文部権大書記官。18年退官、実業界に入る。41年４月18日死去。
柳本直太郎（副長）	７年４月15日－７年９月30日	越前藩士族。元文部省六等出仕。
辻　新次	７年４月22日－８年２月	元文部省五等出仕。信州松本藩士。南校校長、文部次官を歴任、後貴族院議員。男爵。
中江篤介（兆民）	８年４月23日－８年５月14日	土佐藩士族。『東京外国語学校沿革』に拠れば、在任期間は同年２月23日－５月14日とある。
肥田昭作	８年５月14日－８年８月15日	筑紫藩士族。東京英語学校校長を兼勤。のち第119国立銀行頭取となる。
渡部　温（幼名一郎）	８年７月18日－10年１月	静岡県士族。蕃書調所英学教授、開成所教授。柳河春三と親交があり、維新の際『中外新聞外篇』を刊行。日本のジャーナリズムの創成期を担った。のち実業界に入り、東京瓦斯、東京製鋼の創立に参画した。
内村良蔵	10年１月－18年９月21日	米沢藩士族。文部権大書記官に転任。

には教則、三月十三日には校則の改正が行われるのである。この年の『文部省第四年報』によると、外国語学校と名のつくものは全国で九二、そのうち官立は九校、公立六校、私立七七校で、前年より一一校減り、仏独露清語を教えるものは東京外国語学校のみで、英語八七校、仏独語二校であった。そんななかで改正された校則の要点は、「本校ハ仏語学、独語学、魯語学、清語学ヲ教授スル所トス」と明記し定員を五〇〇名と定め、学年暦を一期が九月一日から二月十四日、二期が二月十五日から七月十五日とした。しかし、なによりも重要な改正点は、修業年限を下等三年、上等二年の五年制にしたことであろう。修業年限が一年短縮された背景には、財政的理由もあるが、それよりもこの頃から従来の外国語偏重の教育方針にたいする反動が文部省のなかに見られるようになったことが考えられる。その証拠に翌一八七七年には文部省経費が五パーセント削減され、この年の二月には愛知、広島、長崎、新潟、宮城の英語学校が廃止されることになる。その理由として、各地の中学校が増加したこと、外国語は都会や開港場でこそ需要があるが、国民一般には不必要なものだということがあげられていた。この結果外国語学校は前年より六四校減り、二八校になってしまう。一八七六年の生徒数仏語科一九〇名、独語科二七四名、魯語科四七名、漢語科二七名であった。

翌一八七七（明治十）年四月、「文部省布達」第二、第三号により、東京開成学校と東京医学校が合併され東京大学が誕生し、ついで東京英語学校は東京大学の予備門となる。また同年の『文部省第五年報』にはこんな記述がある。「大学所用教科書ノ繙訳ニ従事ス是レ蓋大学ノ科タル従来大抵外国語ヲ用テ教授セリト雖広ク欧米ノ書ヲ繙訳シ国語ヲ用テ教授スルハ又今日ニ欠ク可ラサルノ挙タルヲ以テナリ」。これまで専門の教育はすべて外国語でなされていたが、この時期になって教科書を翻訳して日本語で学ぶべきではないかという認識が生まれてきたのである。この結果、外国語学校はさらに激減することになる。こうした動きを受けて、外語でも学科改正がはじまり、「仏独魯語学課程

表」と「漢語学課程表」が発表され、「現設学科ノ大要ハココニ記載スルカ如シト雖モ授業ノ実際ニ臨ミ或ハ其妥当ヲ得サルモノアルヲ以テ漸次之ヲ取捨シ他日将ニ其改正ヲ稟議スル所アラントス」という方針が明記されている。一八七四年に外国人教師の手で作成された学科課程を実情に合わせて臨機応変に変えてもいいとされたのである。一八七九（明治十二）年の教育令の制定はこうした教育方針の変化を受けてなされるのである。

三　教育令制定以後の東京外国語学校

第一回卒業生の輩出と魯語科の名称変更

すでに述べたように、一八七八（明治十一）年までの教育制度は、一八七二（明治五）年に頒布された学制を根幹として整備されていった。この学制がめざしたものは、国民の教育水準を高め不平等条約の制約下で西欧諸国の文明を受容し、それと伍していける人材を短期間で創出することであった。しかしそれは一方で、国家の方針とは関係なく、幕末から活発化していた民間の私塾を中心とする洋学の普及を牽制し、一八七一（明治四）年の廃藩置県以来急速に進んだ中央集権化の一環をなしていたことも事実である。学制は理想主義的な方針を打ち出す一方で、それを画一的に日本全国に強制したために、地方に過度の負担を与え、東京外国語学校も含め旧来の教育機関を外国語学校として再編し、しかも最高教育機関である開成学校、後の東京大学の教育制度の改変に応じて、地方の学校の改廃を上からの指令によって行うという側面を濃厚にもっていた。

またこの時代は一八七三（明治六）年の征韓論をめぐって、西郷隆盛をはじめとして、副島種臣、後藤象二郎、板垣退助、江藤新平の参議が下野し、一八七四（明治七）年一月には民撰議院設立建白書が出され、愛国公党が組織さ